

第15回 環境ボランティアリーダー海外研修報告書

まるやま組

萩野 由紀

1. 訪問団体のどの部分を日本のボランティアリーダーにいかせるか

・ 組織運営

ドイツは1960年代の公害による自然破壊によって高い代償を払い、環境保護の意識が浸透した国である。環境NPOのNABUやBUNDでは自然を保護し人と共生する社会作りを目的として政治的、宗教的にも中立な立場を保っている団体である。小さな団体だけでは政策を変えていく力がない事から学び、広い地域に分布する会員の声を地域、州、連邦とボトムアップで吸い上げるデモクラシーの仕組みが作り上げられてきた。また、NABUは専門家集団ではなくふつうの人が専門家を巻き込み、正確で質の高いデータで活動を裏付けする事で信頼を得て、会員数を増やし、ロビー活動を行ない政治に影響力を発揮し政策提言を行なって来ている。

ドイツは小さな組織でも切り開いていける様なしくみをつくるのが上手な国だと感じた。全体を通してNABU、BUND、FOJ、森のようちえん、どこにいてもデモクラシーと自由意志という仕組みのなかで動く事で、戦略的にものごとを下から動かす事に成功している。日本ですぐに真似のできる事ではないが、まずは下から横のつながりを構築する事や、政治に提言できる所とつながりを持つ事、それらのつながりを太くしていく事は取り組み始められる事であると感じている。

まるやま組では暮らしに身近な植物のモニタリング調査を生態学研究者とともに4年間行なって来た。データは日本自然保護協会をへて、環境省に報告している。長期的なミッションとしては希少種を含めた生き物の保全を行なっていきたい。現段階では具体的な保全活動のために周辺農家の環境に配慮した農法を奨励する事や転換した際の農家への補助金、保全目的での土地の買収などは進んでいない。しかし、研究者や地域の他の環境NPO等とのネットワークを構築する事でそのような提言ができないか検討していこうと考えている。国立公園や特別な地域だけでなく、一般の人がごく身近な自然に目を向けその豊かさや重要性に暮らしの中で気付き、行動をおこすきっかけとなる様な場であり

しかし、里山の自然保護は一方で慣行農法との利害関係が複雑に絡み合っ

いるところでもある。まずはまるやまの自然を守る事に対して、同じゴールとは何かを見いだすために住民、行政、専門家、まるやま組でドイツの手法に習って円卓会議を開きたいと考えている。そして5年、10年、20年と長いスパンで地域の自然を見守り、私たちが望むまるやまのあるべき姿を話し合う機会をまるやま会議として開きます。そこで専門家も交えて地域目線のビジョンを出し合い、普及啓発する団体から小さな一歩を踏み出したいと考えます。また、活動内容もそれに伴い、毎月の定例活動やイベントも含めて年間で計画を見直して実施計画に反映することをめざします。

・ 広報

広報の目的は活動の告知や、HPを作成する事をさすのではなく、様々な媒体を通して理念や目指すゴールを発信し、ファン作りをすることをNABUで学んだ。専門家と協働で得た正確な情報をもとに数値化、視覚化して伝える事で多くの信頼を得ていた。またロゴや写真をテーマとあわせて効果的な使い方をして興味をそそるようなストーリーで人々ひきつける事も必要である。他に、新聞などマスコミに積極的にプレスリリースをし、情報を拡散する事も効果的である。

NABUではカエルの保護のためにカエルのロゴマークの企業と協働する事でNPOの活動が企業のイメージアップに役立ち、NPOにとっては助成をしてもらうなどお互いwin-winの関係性を持つ事ができる事例もあった。

まるやま組で早急に取り組まなければいけないのはHPの作成である。今現在のブログでは理念、組織の運営形態、活動内容、会計報告、年間スケジュール、寄付の情報などが示されていないので、本年度中にそこから足下をしっかりと調べていきたい。今回の研修を機に理念を整理してパンフレットを作成（日英）したが、もう少し改善してHP作りに活かしたい。また年間スケジュールも調整して年度末に作成できる様に情報収集する。参加者の中に外国人も多いので基本的に情報発信は日本語、英語両方で行なっていく事とする。

また持続可能なライフスタイルを提案している雑誌や商品を作る企業などと連携して何か出来ないかも検討していきたい。

・ ファンドレイジング

ドイツには宗教的な背景から寄付文化があるが、現在大きなNPOの収入が低迷して来ており、収入を助成金に依存している団体は寄付集めの工夫を凝らし

ている。ファンレイジングの手法には何か特別のことがあるわけではなかった。いかにパートナーシップを組んだ企業にとってメリットがあるのか、投資した場合どのように還元されるのか、企業の顧客にどのようなつながりが期待できるのかということを実際に伝え、相手の心に感動をあたえ納得してもらい、NPOと企業が同等の関係性が作れた時に、同じゴールに向かって進むパートナーとなる事ができるという。また、寄付をしていただいた相手には必ず感謝の意を表す事が大切で、お金の収支やお礼を送り信頼関係を作る事が重要である。またお金以外の労働や物の様な寄付をいただいた場合でも、証明書と言う形で貢献が見える形にすることもより良い関係性を作るのに有効である。

助成金が主な収入源のまるやま組にとって、まずは会員集めやファンレイジングに取り組み実践してみたい。

具体的には活動に興味を持っていただいている美容院がある。活動の写真集を待ち合いの雑誌コーナーに置いてもらい、待ち時間に啓発活動をさせてもらう。売り上げから寄付をいただく事で、美容院の廃液を環境に配慮して処理する事の証明書を発行し、川でつながるまるやまの自然環境保護と美容院のイメージアップの両方が果たせればと考えて、近日中に打ち合せを行ないたいと考えている。環境保全、資金調達という目的の他に、なかなかつながりにくかった地元の30~40歳代の女性たちに美容院で興味を持ってもらう機会になるのではないかと考えている。

また、集落から都会へ移住して、ふるさとに何かの形で貢献したいと考えている中高年に募金集めを試行してみたい。自然環境を次世代へ残したいと思っている石川県人会の東京支部の方々にアプローチするなど情報収集を試みたい。寄付をしていただいた方にはふるさとを支援していただいたことをまるやま組から感謝状をお出ししたいと考えている。

ドイツの様な寄付文化は日本にはないと思っていたが、田舎の集落の伝統行事の中には自治の仕組みが出来ていて意外と寄付を募る場面がある事に今更ながら気付いた。たとえば、お寺で塗り物の御膳の修理代としてあらかじめ食事代と別にお金を集めるなどしている。もしかしたら日本人にあった形の寄付も見いだせるのではないかと考えている。

しかしながら、助成金や寄付と言う相手頼みの財源だけに依存するのではなく自ら出来ることはないかも検討したい。集落の農家と取り組んで来た環境配慮型の農産物で地元企業と商品開発をし、付加価値をつけて販売する事で収入源

になるとりくみも試作中である。商品化に向けてロゴ、パッケージパンフレットなども作成を予定している。NABU が売っていた食料品なども参考に出来ると考えている。

・人材育成

ドイツの環境ボランティア制度 FOJ では国を挙げて人材育成に力を入れていることがわかった。実社会に出る前に自然環境の中で自由意志で保全活動を行い、社会に貢献するプログラムである。研修生はプロジェクトの企画段階から、実施、片付けまですべてのプロセスを自発的に責任を持って任せられる事で、自由と責任感があり充実度を高めていると感じた。また、受け入れ側も若者と係わることで新しい視点やアイデアが生まれ逆に気づき、学ぶ事もあるという。研修生同士のセミナーを定期的に設ける事で横のつながりもうまれる。そこから代表が連邦政府に意見を言える仕組みがあることも若者が働く環境を自ら作り出せる事につながりモチベーションをあげていると思った。

まるやま組で働いてもらっている若い職員にも補助的な作業だけでなく、自由と責任を体験してもらおう事で自ら考え学びがある様に、イベントなどの企画などもまかせ、自ら振り返る機会を設ける事を試みる。また今回の15期生のネットワークを利用して他の NPO で交換に研修をさせてもらえる機会があれば、若者も受け入れ側の私たちも共に学ぶ所があると思う。

2. 日本の環境ボランティアリーダーを支援する仕組みが考えられるか

・ ネットワークづくり

自分の地域や、もう少し大きなブロック、全国組織と段階を踏んで情報交換や連携をできるネットワークがあるといろいろな問題を共有できるのではないかとおもう。ドイツではそれぞれは小さな団体でも地域、州、連邦と政治と同じ様に、力を持って影響力のあるネットワークづくりがなされていた。日本ではドイツと同じ事をそのまま行なう事はできないが、少なくとも社会を変えていくためには社会からの信頼を得られる様な専門性、計画性、説得力、行動力のある団体となって、身近な暮らしの小さな事からこつこつ実践していく事が大事だと感じている。

今回の15期生でそれぞれが持つスキルを合わせて、学びあいの場を設けていく事を検討している。私個人としてはデザインのスキルで伝える、広報の部分

で皆さんの想いや取組みを感動を持って伝えると言う部分で貢献できるのではと考えている。手始めに私たち 15 期生の研修生の、ドイツと日本のつながりをロゴマークという形で見える化してみた。

・ マッチング

連携できる企業とのマッチングや、NPO やそこで働く人の得意分野のマッチングをおこなってくれる支援組織があるとたすかる。それぞれの団体の不得意な分野、例えば生き物調査や広報デザインの外注などをお互いに補完できるとよい。

3. 感想

環境先進国ドイツと同じくらい日本にも沢山の素晴らしい取組みが既に各地で行なわれている事が、今回の研修生を通じて伝わってきました。今ある手持ちの日本の素材を視点を変えることや、見える化やつなげる仕組みづくりをすることでできる事も広げられると感じています。

デモクラシーと日本の和の心や自然観をどう融合させるのが最後迄私たちの課題でした。そのことを日本のそれぞれの場所に踏ん張って、軸足を地域に根ざしながらも日本各地に、世界につながっていきながら考え、提案していくことが私たちにできる事だと考えています。

個人的には今回の研修の前から、自分の活動の意味や立場についてずっと、悶々と考えてきました。何故そう感じるのかと言えば自分の理念の根幹にあるべきものははっきりしておらず、活動について言葉で端的に説明がつかなかったからです。研修中は視点の違いや考え方に多様性がある事は重要な点だと思いました。自分の想いを伝えたり、違う発想にであったりするうちに頭の中が少しずつ仕分けされてきました。それでも自分の場所に帰って、やってみて又考えて、試しながらしか、なかなか自分の答えは見つからないのだと思います。この霧が晴れて何かが浮かび上がるのを夢見て、一步一步進んでいこうと思います。

最後になりましたがこの貴重な 10 日間を与えて下さった、セブン-イレブン記念財団の皆様、萩原団長、小野さん、研修生の皆さん、通訳の小島さん、JTBの武藤さん、ドイツの訪問先の皆さん、セブン-イレブンのレジ横で寄付をくださった沢山の皆さん、支えてくれた家族にこの場を借りて感謝いたします。本当にありがとうございました。